

ミャンマーの森に魅せられて

大西 ^{しんご} 信吾さん (湊町)

大西信吾さんとミャンマーとの係わりは、1990年から国際協力機構(JICA)の林業援助プロジェクトで、ミャンマーに5年間滞在したこと始于ります。「東南アジアでは、多くの木が伐採され、森が消滅しています。そんな中、今なお国土の約半分に天然の森が残る国があります。それがミャンマーです。それはなぜなのか、もっと深く知りたくなっただけです。」もともと熱帯に生息する動物が好きだったこともあって、大西さんはプロジェクト終了後、野生動物の住むミャンマーの奥地へとカメラを携え、足を進めました。それ以来、毎年のように2か月から半

年はミャンマーに滞在しています。そこで出会ったゾウとゾウ使いの生活に同行するうちにわかってきたのが、ミャンマー独自の林業スタイルです。「林業の世界的主流は、すべての木を伐採する『皆伐』なのですが、ミャンマーは、森の中から必要な木だけを切っていく『択伐』という方法を探っています。森を残しながらその恵みを得るこの方法により、ミャンマーには豊かな森が残ってきたのです。」この「択伐」では、必要な木を一本ずつ選んで切るため、運搬に機械は使えません。そこで活躍するのが、木立をぬって器用に木材を運ぶゾウです。「ミャン

マリアにかかったり、突然毒ヘビに遭遇したりと、ミャンマー滞在中にヒヤッとした体験は数えきれません。しかし大西さんは、ミャンマーの人たちからは敵意を感じたことが一度もないそうで、今までやってこられたのも、ミャンマーの人たちの優しさのおかげと笑顔で語ります。今回、そうして得た貴重な体験を『ゾウと生きる森』という本にまとめました。ミャンマーの魅力伝えるために、大西さんはこれからも意欲的に活動を続けていくそうです。



▲ミャンマーを訪れ、初めてゾウのキャンプ(村)に滞在した時のようす('97年9月、写真中央が大西さん)

マーでは、使役ゾウは放し飼いで森の中で自由に生活しています。ゾウはゾウで自活していて、ゾウ使いも森で生活しており、作業の時だけ協力して働くのです。えさで引き止めているわけではなく、ほかでは見られない動物と人間の関係です。「ゾウとゾウ使いは干渉し過ぎることなく、しかしながら、生涯の伴侶としてお互いの生き方を尊重し合っているそうです。

ミャンマーでも近年、重機などの導入による変化があります。「文明を享受している私たちが、便利な生活を捨てられないのと同様に、発展途上国の人たちが経済的に豊かで便利な生活を求めるのは止められません。」目先の利益を求め多くの木を切るか、今までとおり必要な本数だけ木を切り、森を残すか。これからどういう選択をするかは、国民の判断に委ねられています。